
悪魔と契約しちゃいました

ガラクタ・エントツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔と契約しちゃいました

【Nコード】

N5093Y

【作者名】

ガラクタ・エントツ

【あらすじ】

何の因果か、悪魔と契約してしまった主人公が、事件解決に仲間と共に奮闘することに。

第1章 「呪われた少女」 なぜか学年一の美少女と付き合い合うことになった主人公。当然、そんな上手い話があるわけなく・・・

第1話 悪魔と契約しちゃったかもしれない

「本当に、悪魔と契約してしまったかもしれない」

ここで言う悪魔とは別に、高利貸しでもなく、鬼嫁でもない。
文字通り本物の悪魔だ。

帰宅の途中、怪物に襲われて、悪魔に助けてもらったわけでもなく。

朝、目覚めたら、隣に可愛い小悪魔が裸で寝ていたわけでもなく。
別に誰かを恨んでいたわけではなく。世界征服をたく召喚したわけではなく。

ただ、単純に悪魔に騙されて、近藤信也は悪魔と契約してしまった。

近藤信也は、自分の手の中にある 아이폰 を見て、そう思った。

白いワンちゃんが出てきて、「 아이폰 を欲しくないか」と聞かれたら、「欲しい」って答えるでしょ。

「でも・・・お金ないんだけど」

「学生はお試し1週間無料」

「なら・・・」

ミミズが這ったような魔文字は気になったけど・・・無視しちゃったよ。

お父さんに、契約勧められたら、サインするでしょ。

サインした直後に、いつも通り自分のベットで目が覚めた。
朝も、学校へ行っても、いつもと変わらなかった。

しかし、変化は、放課後に突然起こった。
今、思い返すと、あのことも悪魔との契約の結果なのかもしれない。

美女。それは、遠くから見るもので、自分には縁がないもの。そう思っていた。

彼女。妄想の恋人ならいますが・・・現実にはいません。
恋。片思いならベテランです。

出会い。それは・・・突然にやってきた。

学年一の美少女、水上麗華^{みなかみれいか}が、なぜか僕の目の前に居る。

少女は垂れ目で少々童顔、ストレートロングな髪で清楚なお嬢様の雰囲気을漂わせていた。

その一方で、出るところは出ているグラマーな体形なので、男子の間での人気は断トツだ。

彼女と今まで一度も話したことがない。というよりも、半径5メートル内に近づいた記憶もない。

そんな彼女が、なぜか、同じ部活の星野守と久保恵に連れられ目の前に居る。

何でも、僕と彼氏彼女の関係になりたいらしい・・・建前上。
なんじゃそれ。

彼女には、変な噂がある。
彼女の彼氏になった男は死ぬ。という噂だ。

第2話 彼女

彼女に初めて彼氏が出来たのは、中2の夏。

同じクラスメートだった。でも、最初の彼氏は、付き合い始めて3週間後、行方不明になった。

以前にも家出をしたことがある彼の失踪は、家出ということで、社会的には処理された。

2年後、高校生になった彼女は2歳年上の3年の先輩と付き合い始めたが、1週間後に交通事故で死亡。

この頃から変な噂が出始めた。

彼女の彼氏になった男は死ぬ。

彼女の美貌と人気に嫉妬した一部の女生徒や彼女に振られた男たちの悪口だった。

しかし、その噂は、悲しみに打ちひしがれた彼女をさらに追い詰めるものだった。

そんな彼女を励まし、救ったのが、昔ながらの幼馴染の少年だった。

半年後、彼女は幼馴染と晴れて恋中になった。しかし、その3番目の彼氏は、2週間後に自殺した。

これで確定的になった。彼女の彼氏になった男は死ぬ。

それ以降、多くの男たちに告白されていた彼女に対して、さすがに告白する男は居なくなった。

以前は学年の中心的人物だった彼女は、「呪われた女」「不幸を撒く女」と悪口を言われ、女生徒にも避けられ始めていた。

「つまり、彼女の噂が事実でないことを証明するために、実験台になれと」

「そういうこと。確か、先週、オカルトネタはほとんどは嘘って言うってたよな」

「確かにそうだけど．．．」

魔法や霊能力なんて存在しない。仮にあつたとしても、テレビやネットで騒がれるのは、紛い物。

それが、先週の近藤の主張だった。

もしか、先週の会話は今日の伏線だったのだろうか？

星野にはめられたようだ。

「なぜ、自分なんだ。星野でも良いじゃないか．．．水上さんだって、僕より星野の方が嬉しいだろ」

「．．．」

久保と水上がお互いの顔を見合った。そして、水上が口を開いた。

「星野君は．．．駄目だよ」

「??」

「星野君は、皆の王子様だから．．．」

星野王子様。それが女性との間での星野守の二つ名だ。

見た目も良く、運動もできて性格の明るい星野は、女生徒に人気があり星野王子様と言われていた。

そして、王子様は誰のものでもない。皆の者。だから、誰も手を出してはならない。

これが、この学校の女子の間での不文律である。

ちなみに、女性との間での近藤の二つ名は金魚のフン。

星野に、いつも付いている邪魔なものと言う意味らしい。

「こんなこと頼めるのは、お前しかいないだろ。お前、彼女ことが可哀想だとは思わないのか？」

「思う」

「なんとかしてあげたい。力になりたいと思わないのか」

「思う・・・」

何か星野に丸めこまれている気もするが・・・力になりたいと言うのは嘘ではない。

機会がなかったから何もできなかったが、彼女が「呪われた女」「不幸を撒く女」と悪口を言われているのを聞き、良い気持ちはしていなかった。

しかし、簡単にOKの返事は出来なかった。

自分が死ぬかも、と言うこと以前に・・・

「1つ問題があんですけど。その・・・僕には、好きな人がいるんですが・・・」

クラスメートの小野寺さん。

好きな人がいるのに、他の人と付き合うなんて浮気みたいではないだろうか。

それに、このことが原因で、小野寺さんに嫌われる、縁が切れるようなことはないだろうか？

「問題ないよ。今後、付き合う可能性はないわけだし」

「・・・」

さらっと、とんでもないこと言うな久保は。

久保は、小野寺さんと仲が良いので、真実味があるだけ心に刺さる。

「本当に彼女のことを好きになれって言うてるわけじゃないんだよ。」と星野。

「建前上だよ。建前上。嘘でも、女性と付き合えば、本命と付き合い際の練習になるだろ」

星野が近藤の側により耳元で女性陣に聞かれないように囁き始めた。

「それにな。女性って言うのは、フリーの男よりも、他人の男を欲しがるもんなんだよ。彼女と付き合えば、小野寺さんの関心もお前に向かうこと間違いなしだ」

そういうものなのだろうか？

女心に疎い近藤には判らなかった。

その日の夜、家に帰ると予想外のことが起きていた。

姉が 아이폰 5 を買うということで、アイフォン 4 をくれたのだ。

夢の中の願いが現実になっちゃったよ。

偶然に決まっている。まぐれだ。

でも、万が一・・・本当だったら・・・僕は悪魔に願いことを叶えてもらったことになったのだろうか。

もしかして、対価として魂を取られるのだろうか？

アイフォン 4 の等価交換が、魂か？

どれだけ安いんだ。自分の命は。

それとも仮契約だから別の対価だろうか。

お金がなかったたので本契約ではなく、1週間お試し期間の仮契約にしたのは正解だった。

まてよ。

悪魔との契約が本当だとしたら・・・世の中に本当に霊的現象があることになる。

となると・・・彼女の噂も本当なのだろうか？

偶然だ。偶然に決まっている。

そう信じて、近藤は寝ることにした。

第3話 恋人

次の日は、朝から水上さんと一緒に登校した。
付き合っていることを皆に暗に教えるためだ。

そして、予想通りクラスメートの1人が、食いついて来た。
しかし、予想外の人物だった。

近藤に最初に声をかけてきたのは、活発な雰囲気を感じさせるシ
ョートヘアの美少女。

僕の斜め前の座席に座る憧れの女性、小野寺さんが聞いてくると
は思わなかった。

「近藤君。水上と一緒に学校来たけど。もしかして付き合っている
の？」

その質問に、クラスの注意が自分に集まっているのを感じた。

何とも言い辛い。

「その・・・付き合うことになりました」
背後から歓声が上がる。

「いつから付き合っていたの」

「つい最近かな」

「どっちから告白したの」

これはさすがに自分とは死んでも言えない。

「なっ・・・何となく・・・あえて言っていると彼女かな」

「そうなんだ。星野君や恵ちゃんも知ってたの？」

側に居る星野と久保に話しかける。

「あたしも昨日知って驚いたよ」

久保は白々しく答えた。

「星野君は」

「僕はもう少し前から。近藤に相談されてね」

した覚えはないんですけど。

こんな感じで、他の女生徒も巻き込んで、会話は先生が来るまで終わらなかった。

一方、水上麗華もクラスメートから質問を受けていた。

「ねえ、麗華。6組の近藤と付き合っているって．．．本当？」

声をかけてきたのは、小学校時代からの親友の高井まどかだ。

「本当よ」

周辺からどよめきの声が上がった。

「3組のバスケット部の近藤君じゃなくて、本当に6組の近藤なの？」

「そうよ」

「あの地味で、金魚のフンって言われてるアイツだよ」

「そうだよ」

「えっ．．．なんで！！！」と高井まどかは声を荒げた。

「麗華。親友でしょ。なんでそういう大事なこと、私に一言も相談してくれなかったの」

「ごめん。いろいろあって。それに、近藤君って．．．そんなに悪い人じゃないと思うけど．．．確か地味だし、普通の人だけど．．．」

「まあ、確かに．．．性格が悪いって聞かないし．．．後輩の面倒見も良いって聞くし．．．身長だって普通より高いし．．．見た目

だって悪くないし．．．．じゃあ、どこが良いのよ」

「それは．．．．私にも判らない」

「何よそれ。それは一時の気の迷いよ。いろいろあったから」
周囲の女生徒もうなずく。

「今からでも、断りに行きなよ」

「それは駄目よ．．．だって、私から告白したんだもの」

予想外の展開に周辺の空気が凍った。

「麗華。どこが良いかも判らないのに、告白したの」

「しょうがないじゃない。だって、好きなんだから．．．」

2時間目の休み、男子学生がトイレに集まり雑談をしていた。

「なあ、知ってるか。近藤の話」

後から入ってきた鈴木は、高田に声をかけた。

「ああ」

「近藤の奴、羨ましいよな。あの水上麗華と付き合えるんだぜ」

「羨ましいか？ あの女と付き合つと死ぬんだぜ」

「水上と付き合つて、やれるなら、死んでも良いよ。近藤の奴、上手くやったよな」

「お前、前から麗華のこと好きだったからな」と手を洗っていた伊東が口をはさんだ。

「死んだら意味ないだろ」

高田は、水上を美人だと思うが、さすがに自分の命を犠牲にしてまで付き合いたいとは思わなかった。

「よっぽど、男に飢えていたんだな。近藤でもOKだってことは、俺でもOKだぜきつと」

伊東は肥満気味で容姿も悪く、女生徒の評判が良くないことを自分でも認識していた。

「なんでも、水上の方が告ったらしいよ」

「マジかよ。あいつのどこが良いんだよ」

今まで水上麗華が付き合っていた男は、みんな格好良く、女性に人気がある男ばかりだった。

そのため、自分と同レベルか、それ以下だと思っていた近藤が、告白されたとの話を聞いて、鈴木は本当に悔しそうだった。

「なあ、あいつが死ぬか。かけようぜ」と鈴木。

「いいな」と伊東。

「どうせなら、他の奴らも巻き込もうぜ」

こうして、学校全体で、近藤の生死をかけて、賭けが行われることになった。

第4話 昼休み

水上さんは1組で、近藤は6組とクラスは別々。

水上さんは茶道部で、近藤は演劇部と部活も別々なので、会うのは登校時と下校の時だけと近藤は思っていた。

「昼休み。ご迷惑じゃなければ、一緒に屋上でお弁当食べませんか」
そのため、3時間目の休み時間にメールが来た時は正直予想外だった。

「そのこうした方が、恋人らしいかなと思ひまして」
「確かに。周りにも何人かいますし・・・」

開いている場所を見つけると、さっそく弁当を食べ始めた。

最初の数分は沈黙の時間が続いた。

姉や妹もいるし、女友達もいるし、部活では女性の方が多い。
しかし、その会話は、兄妹の会話であり、友人としての会話だ。
正直、恋人同士の会話なんて判らなかった。

最初に口を開いのは彼女だった。

趣味の話から家族の話し。彼女は思ったよりも気さくな性格で、途中から思いのほか会話が進んだ。

「その・・・近藤さんのお弁当は誰が作っているんですか」

「自分で作ってる」

「毎朝ですか？」

「毎朝。家族の分も作ってる」

「大変じゃないですか？」

「お金もらえるからね」

「そうなんですか」

なぜ、がっかりした様なリアクションをするのだろうか？

そして、何か非常に言い辛そうだ。

「その・・・少し作ってみたんですけど・・・食べていただけますか」

そう言つと彼女はカバンから小さな弁当箱を取り出した。

中には、綺麗にできた手作りの卵焼きなどが入っていた。

「いただきます」

食べてみると・・・美味しい。

うーん、本当にいろいろできる人だな。これで運動もできたら、完璧超人ではないだろうか。

それにしても、彼女がここまで恋人の振りをするとはい意外だった。もっと片手間な物だと思っていたのだが・・・

それにしても、何なんだろう。この空気は。傍から見たら完全にラブラブのカップルではないだろうか。

「ごめんなさい。迷惑掛けているでしょ。私、今のところ、これくらいしか近藤君に恩返しできなくて・・・でも、近藤さんが自分で作るんだったら必要ありませんね。私、どうしたらいいんでしょうか？」

どうやら、恋人の振りではなかったらしい。自意識過剰だな。

「気にしなくて良いですよ。僕も割と楽しんでますし」

「そうですか。お優しいんですね」

「いや．．．それ程でも．．．」

非常に照れくさい。

一方的に相手の好意に甘える関係というのは、意外と苦しい物だ。僕としては彼女との関係を円滑にしたいのだが．．．何か彼女にしてもらえないだろうか。

「そうだな。終わったら．．．小野寺さんとの仲を取り持ってよ」

「それで良いんですか？」

近藤は頷いた。

「判りました。頑張ります」

彼女は頑張ることを近藤にアピールするために可愛らしく小さくガッツポーズをした。

彼女の少し明るくなった態度を見て、何か少し関係が前に進んだような感じがした。

「その．．．甘えついでに、もうひとつ、お願いして良いですか？」

「何ですか？」

「今週の日曜日、時間がありましたら．．．その．．．デートしませんか」

その言葉を聞いて、驚きのあまり、近藤は思わず、食べ物などを詰まらせてしまった。

第5話 暗い影

「日曜日にデート？ いつからそんな関係になったんだ」
星野が驚嘆の声をあげた。

場所は体育館の壇上の幕の裏。

部活の休憩時間を利用して、星野に現状報告することにした。

「今日の昼休み。彼女の方から」
近藤も得意げに報告する。

「ずいぶん楽しんでいるのね。こっちは心配で夜も眠れないのに・・・」と久保。

「冗談だろ」

「当然、嘘に決まっているでしょ」

「まあ、楽しむのは良いけど。あんまり浮かれるなよ。今、学校でお前の生死を賭けた賭けが流行っているんだから」

自分の命が賭けの対象か。

正直、気分が良い物でもないし、賭け自身法律違反だが・・・ここでそれを言っただけ怒るのは野暮だろう。

「比率は？」

「2対3かな」

「どっちが3なんだよ」

「お前が死ぬ方だ」

「みんな酷いな」とは言ったものの過去3人は漏れなく死んでいるわけで・・・

みんなが死ぬ方に賭けなくなる気持ちも判らなくもない。

「だったら、生きる方に1万円賭けておいて。生きる励みになるから」

「じゃあ、俺は．．お前が死ぬ方に1万円な」

「じゃあ、私は5千円かな」

「何だよ。それ」

「お前が死んだとき、悲しみが少し癒えるだろ」

「．．．．．」

「冗談だよ。俺は、お前が生きる方に1万円賭けているんだから頑張ってくれよ」

現在の時間は夕方の6時31分。1分遅刻だ。

一緒に下校するため、6時30分と待ち合わせしていたのに遅れてしまった。

水上さんが校門のところで僕を待っているが、ロビーからも見える。

その姿が妙に愛らしい。

偽りの恋人同士のはずだったのに。

登校と下校の時だけの付き合いのはずだったのに。

日曜日、デートですか．．

何と言つか、どんどん展開がエスカレーションしている。

ひよっとしたら、水上さんとあんなことやこんなことをする関係にまで発展するかも。

そんなことを妄想しながら、僕は下駄箱を開けた。

隙間から入れたのだろうか。

中には、一枚の手紙が入っていた。
まさか、ラブレターか。
まさかのモテキ到来か。

手紙には、宛名も差出人の名前も書いていない。
急いで手紙を開けると1枚の紙が入っていて、その紙には2行の
短い判り易いメッセージが書いてあった。

「水上麗華と直ぐに別れる。
さもなくば死ぬことになるぞ」

さっきまで浮かれていた自分がバカみたいだ。

でも、この手紙でいくつかのことがハッキリした。
悪霊が手紙を出すはずがないので、彼女は人間に恨まれている。
しかも、直ぐに手紙が来たことから、たぶん、この学校の人間に
だ。

過去にも、彼女の彼氏たちは、このような手紙をもらっていたの
だろうか？

彼女に聞く必要がある。

でも、今日の下校時は止めて明日にしよう。
せめて、今日くらいは、楽しく終わりたいから。

第6話 呼び出し

彼女との初めての下校は、僅か10分ほどであったが昼食のときのように話が進み、楽しい時間を過ごすことが出来た。

脅迫状らしきものがあつたけど、今日一日、無事に楽しく終わることができるかと思つたのだが、人生そう上手くはいかなかった。お風呂から上がった後、寝る前にメールを確認すると差出人不明の一通、気になる表題のメールが入っていた。

「水上麗華の彼氏へ」

急いで本分を読む。

「不幸を避けたければ、今夜11時に、一人で。×公園に来い。ブランドコのところまで待っている」

いきなりの呼び出しだ。

もしかしたら、今日、脅迫状を出した人物かもしれない。行くべきか。

行ったら襲われるかもしれない。

しかし・・・うまく行けば相手の正体を掴むチャンスだ。

近藤は大急ぎで、パジャマから外出着に着替えると、自転車で。×公園へと向かった。

○×公園は、近藤の家から5分程離れ、団地の側にある小さな公園だ。

日中は幼稚園生や小学校低学年生が良く遊んでいる公園だが、夜の11時にもなると、通常は誰も居ない。

しかし、今夜は、公園の外灯がブランコに座る長髪の女性を浮かび上がらせていた。

襲われる可能性があるため、ブランコの側には行かず。

公園の周りを探索して、メールの差出人の正体を探ろうと考えていた近藤にとって予想外だった。

どうやら相手は本当に近藤と会いたいらしい。

近藤は意を決して、相手の側に行くことにした。

少し近くによると顔を見ることが出来た。

凜とした顔つきの女子高生らしき女性だ。落ち着いた大人びた感じで女子大生かもしれない。

ベージュのブレザーにジーンズと落ち着いた服装が長身でスリムなスタイルに良く似合っていた。

「あなたが近藤信也君？」

僕に気がついた彼女はブランコに座りながら僕に声をかけてきた。

「そうです。それで話って何ですか」

「そう焦らないの。そんな緊張して立っていないで、横に座って頂戴。話辛いでしょ」

彼女は明るい声で僕を隣のブランコへ誘う。

僕は背後に気をつけながら、彼女に横に座った。

「あなた、彼女の噂知っているでしょ。なんで彼女と付き合いおうと思ったの？ 美人だから。それとも、好奇心。それとも、一目惚れ？」

彼女は茶化すような口調で質問を始めた。

「そんなのあなたには関係ないでしょ」

「多少は関係あるわよ。私のモチベーションにね」

「モチベーション？」

変な理由を言う人だな。

「そうよ。あなたが心の底から彼女を愛しているなら手伝う気になるし。好奇心なら・・・死んでも自業自得かな」

「あなたは、彼女の何を知っているんですか？」

「あなた彼女が本当に呪われていると思う？」

「彼女は、呪われていません」

「そうよね。そうじゃないと付き合いおうなんて考えないわよね。彼女は呪われていない。それは正しいわ。でもね。彼氏が間違いなく死ぬって点も間違っていないのよ」

そう言っていると彼女の顔は突然真剣なものになり、僕の目を見て話し始めた。

「今のままでは、あなたは殺される。間違いなくね」

殺される？

どうやら、彼女は事故死や自殺ではなく、他殺だと考えているようだ。

彼女は警察以上の何かを知っているのだろうか？

「あなたは、彼氏が死んだのは事故ではなく、他殺だって言うんですか」

「間違いなくね。彼女の側に、彼女の彼氏を呪う殺す人間がいるの」「警察の結果では事故や自殺ですよ。それも呪の結果ですか？ 呪の結果、都合良く事故に合い、自殺すると」

「そうね。結果的に、この世界ではね。でも、別の世界では違うわ。彼らは魔力で殺されたのよ」

何か話が急におかしい方向に行き始めたぞ。

「なんで、そんなことが言えるんですか？」

「それは簡単よ。私が『茨の魔女』だから。私が悪魔と契約した人間だからよ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5093y/>

悪魔と契約しちゃいました

2011年11月20日00時07分発行